竹嶋一件関係古文書

「清助の手紙」（『和久屋俵家文書』　番号七六）

（前欠）
働方□□運賃積之義左之通
御座候
一大舩之分神徳丸運賃積仕候
得者諸方御城米ヲ初メ諸
御大名様大坂届ケノ米當年ゟ
八歩登リニ相究候左候得者運
賃積之義者沢山ニ御座候間
御上様江御厄介之義不申上
（結）
私働ヲ以テ荷物聞合セ出情仕
尚御上納之義も追々御上納可仕
候様奉存候誠ニ是迄ハ何角思ひ
（文化十年）（文化十一年）
通りニ不参ニ付無據酉戌両年之
所者江戸表江参リ長々逗留
仕候舩手之義者夏分ヲ重モニ
相拵候得とも其儀得不仕御上納
方も不埒仕候仕合ニ御座候
（文化十一年）
一右大舩買積之働仕候義ハ去春
（文化十一年）
より相談仕置候得とも尚旧冬も
掛合置罷下り申候此義ハ弐千石
積ニ而凡米直段石五拾目と心當
候へ者銀子百貫目程入リ申候義ニ
御座候尤此銀子出方之義者
大坂油町三丁目布屋徳兵衛
布屋四良兵衛大和屋小兵衛布屋
重兵衛錢屋喜兵衛同本町一丁目
伊丹屋四郎兵衛糸屋重蔵山本や
四郎兵衛山本屋安兵衛丹羽屋久兵衛
以上拾軒ニ而嶋木綿操わた
類銀六拾貫目斗り之荷物積受候
約速ニ御座候世話人之義者高田屋
嘉蔵日向屋久五郎伊勢屋弥兵衛
依て私身分受合之処者天満屋
文右衛門ニ御座候是ハ銀目高ニ而壱歩
口錢遣候ニ付受合呉候事ニ御座候
誠ニ諸方大舩之義何連も皆
同様之事ニ而手前ゟ出銀仕荷
物積候舩者無御座候右申上候通
壱歩口錢遣シ受合貫荷物積
受候事ニ御座候万一海上之義
御座候節者可為御法者申書付
入置申候
一防州くだ松磯辺儀八郎方ニ而
約速仕置候五斗入塩五千俵此
代銀凡拾七貫目右之内五貫目
入銀入置殘銀之義者北国登リ
之節相渡約束ニ御座候
一下ノ関石見屋卯兵衛方ニ而黒
砂糖鰹ぶし七嶋塩鯨大白
砂糖其外少々北国向之買物
銀高ゟ凡拾貫目余買受積下リ

約束ニ仕置候尤此内へ銀五貫目
相渡約束仕置申候外ニあミや
七郎右衛門方ニ而北国向之荷物代銀
五貫目斗之物約束仕置候都合
銀高凡九拾弐貫目余丈之
荷物積出し者相成候得共右内
拾貫目入銀之処出来不申候而者
右荷物積受相成不申尚国元へ
罷帰り銀子少々：而も持参不仕而者
荷主方氣向悪敷相成荷物
出方不足仕候へ者思ひ通銀高
相調不申候
一正銀六ゟ目
右大舩乗出シ之節
舩方弐拾壱人ちん銀其
外粮米諸入用元入
銀心當御座候
（：貫）
二口ゟ銀拾□□目
（
一周州御米千六百石
運賃銀拾四ゟ八拾目
但シ大坂付壱石付銀八匁八分ツツ
）
（
一加州御米千九百石
運賃米三百八拾石
但シ大坂付百石ニ付式拾石ツツ
）
（
一佐戸御城米千九百石
運賃銀拾六ゟ弐百五拾匁
但シ壱石ニ付銀七匁五分ツツ
）
（
一庄内御城米千九百石
運賃銀弐拾四ゟ七百匁
但シ壱石ニ付拾三匁ツツ江戸付
）
（
一秋田御米千六百石
運賃米四百拾六石
大坂付百石：付式拾六石ツツ
）
（
一津軽御米千六百石
運賃米四百拾六石
大坂付百石：付式拾六石ツツ
）
（
一小倉御米千八百石
運賃銀拾五ゟ三百目
江戸付壱石ニ付八匁五匁
）
（
一肥後御米千七百五拾石
運賃銀九ゟ九百七拾五匁
大坂付壱石ニ付五匁七分ツツ
）
右之通り御座候以上
今津屋
清助
（文化十二年）
亥
三月吉日

『竹嶋渡海一件記　全』

（東京大学附属図書館所蔵）

朝鮮持地竹嶋渡海一件大略

石州那賀郡濱田松原村
今津屋きく方ニ
無人別ニ而罷在候
當時無宿
金清事
八右衛門申口
申三拾九才

一私義朝鮮持地竹嶋江渡海仕候始末
御吟味御坐候此段私義先達而書面
松原浦ニおゐて今津屋八右衛門ト家
号名前差出廻船壱艘所持直乗船
頭渡世いたし罷在右竹嶋最寄之
海上之松前表江渡海之船請ニ而私儀も
先年ゟ度々松前渡海仕其度毎及
悲讒候儀ニ而元来右嶋者右見國海

岸ゟ亥子之方ニ當り海上百里余も相隔
一名欝陵嶋とも相唱候空嶋ニ而草木致
繁茂地先ニ者鮑其外魚類夥敷寄
集居候様子ニ見請候付右嶋江渡海之
上草木伐出漁業ニ而もいたし候八八自
己之徳用者不及申莫太之御國益ニも
可相成ト心附渡海願取方之儀寄ニ致
勘弁罷在候折柄七年以前寅七月

松平越中守様御領所越後国村々御年
貢米江戸表江之運賃積引請同国
新潟ニおいて夫々積入直積致出帆候
私請度々難風逢翌卯七月江戸表江
着船之上其筋江御廻米届方之儀
無滞相移シ右船者損所出来候付無處
□船ニいたし乗組水主共八不殘暇差置
私者外自用有之其侭町宿ニ逗留

いたし罷在其頃前書濱田表之儀
者先松平周防守様御領分中ニ而御同人
江戸御屋敷詰御家来勘定役村井
荻右衛門方者兼而知る人ニ付同人長屋江
見廻ニ罷越候節竹嶋渡海志願之次第
相咄其砌者周防守様重御役柄中
ニ付御勘弁を以右嶋渡海之儀私江
被差免候様相成候八八周防守様御勝手
助成筋八勿論第一御国益之一番
ニ付宜取扱之儀荻右衛門方江相頼候
處右迚ニ而者不慎ニ相聞候間篤ト取
調内様書差出試可申旨被相答候付
承知致旅商江立歸積ニ致勘弁内
存書取調文面之儀者兼而致悲讒
候次第ニ而者竹嶋之外ニ松嶋ト唱
石見国海岸ゟゟ（ママ）子之方ニ當リ海上
七八拾里斗相隔候小嶋有之右松竹両

嶋とも全空嶋ト相見其侭被差置候
も殘念之至ニ付草木伐出漁業をも
いたし候八八自己之徳用而已ニ無之莫
太之御國益ニも可有之ト見込右ニ付周防
守様へ冥加銀差出方之儀者稼試候上
歩合取極可申旨両嶋渡海之儀内願
仕候事之良自筆下を以相認同八月日不覚

荻右衛門方へ持来いたし候處直様同人
上役周防守様御家来勘定頭大谷作
兵衛方へ斗被召連俱々右書付披見之上
再應両嶋之次第被相尋前同様
相答之処追而可被及沙汰有一先可致帰
國旨作兵衛被申渡候付其趣相心得外
用向取片手同十一月日不覚江戸表出
立同十二月晦日陸路ニ而帰國いたし候處

翌辰正月十一日周防守様在所詰御家老
岡田頼母方召仕橋本三兵衛ゟ私呼寄
右内存書江戸表ゟ頼母方へ相廻有之
良申聞見込之儀再三相尋候付是又前
同様申答頼母勘弁を以渡海相成候様
取扱之儀三兵衛へ相頼置候處同月十八日江戸
詰荻右衛門方ゟ私へ向書状至来文面之趣
意者竹嶋之儀者日出之地共難差極候付

渡海目論見相止可申段申来候付其節始而
右之次第承案外之至ニ而志願空敷相成
殘念ニ存即日三兵衛方へ右来状持参いたし
頼母方勘弁之儀相頼置其後様子尋ニ罷

越候處右様江戸表ゟ申来候上者竹嶋之方
相止松嶋之方渡海いたし試可申分被仰聞
候趣三兵衛申聞候付松嶋之儀者小嶋ニ而見込
無之候得共江戸表へ八右嶋之名目殘

以竹嶋へ渡海いたし試萬一外ニゟ相洩候時
八漂着之姿ニ申唱候八八子細有之間敷ト存
候旨三兵衛へ申聞置候處其段承知之上早々
渡海致嶋方及細見弥見込之通無相違
候八八猶取扱方も可有之夫迚之處試之義
ニ付御領主御勝手ゟ入用銀下ケ渡ニ其不相
成候間私手元ニ而可致銀繰段をも頼母方
被申聞候委細三兵衛申含ニ付其之意ニ隨

當表ニ而銀主聞繕可申候得共自談而已ニ
而者信用致間敷候間慥ニ持込候多め周
防守様當表蔵屋敷詰御家来ゟも銀
主共へ聲懸有之様致度旨申聞之處三
兵衛致承知當表詰御家来嶋崎梅五郎
方へ取扱之儀可申置間同人方へ可致相談
旨申含三兵衛ゟ梅五郎方宛之添状相渡候付受
取同二月七日國許出立同月十六日着坂いたし

直様梅五郎方へ罷越添状相達右ニ付銀主
共へ聲懸之手筈をも申談置私八町宿ニ逗
留いたし心當之先ニ承繕候得共相應之銀
主無之心配いたし罷在候處同月日不
覚前以知ル人中橋町中国屋庄助罷越
同人八周防守様領分持山石州太麻山ニ生
立有之立木買出之儀江之子嶋本町播磨

屋藤三郎申合其以前ゟ周防守様當表
詰御家来林品右衛門方引合中ニ而私も其
儀ニ携罷在候付幸之儀ト致竹嶋者石州
沖手ニ有之空嶋之良申繕此度周防守様
役場　差圖を以試ニ渡海いたし改而稼方
被差免産物類當表へ積登候仕儀ニ至候
八八莫太之徳用有之義ニ付追而産物賣
捌引受人ニ相成積を以右渡海入用銀差
出間敷候之儀申勧候處不承知ト八
不申聞候得共庄助自力ニ難及候間藤三郎
をも可申誘由申聞立別翌日同人同道ニ而罷
越渡海試之手續再三相改候言葉之端々
疑念差含候体ニ相聞候付口實之儀者周防
守様蔵屋敷ニ而承合何連共可致勘弁旨
申聞右之者共を追々梅五郎方へ同道い
たし直談之儀申聞候処同人儀も右之段
ニ申述無危踏出銀之儀申勧候付両人
とも疑念相晴庄助者銀壱〆目致出銀藤
三郎八船大工職渡世いたし候付右嶋へ
渡海之廻船新ニ造立候積申合猶又同人
知ル人玉造八尾町和泉屋半三郎も右目
論見之廉々ニ加入いたし候得共勝手
ニ付引合向之儀者橘町大黒屋定七引受
同人を以金拾両差出シ藤三郎も職用繁多
之良を以同人親類安治川南弐丁目淡路屋
善兵衛へ同様引合向相任候儀ニ而右之外
銀主無之廻船之儀者被嶋船掛萬事
者當表出船之節大麻山立木及見之儀周防
守様御家来山役吉田柳左衛門方へ品右衛門方ゟ
之添状貰請候付私手引を以右添状差出
柳左衛門方へ追々引合之上直組次第立木
拂出之儀被聞届候付山方及見一旦帰坂
いたし翌二月右両人并藤三郎半三郎
定七等同道ニ而猶又罷下立木払方之儀
柳左衛門方へ及引合候得共直組相對不行届
候ニ付而者右之廉者破談之姿と相成其筋
庄助義竹嶋渡海目論見之儀も此上之
成行無覚束存候良ニ而是迄の出銀者損失ニ
いたし右一条加入も相退度旨申聞候付
乍殘念其意ニ隨藤三郎半三郎八無其儀
候得共両人共外用有之趣ニ而善兵衛江雑
用金四拾両相渡置定七一同帰坂いたし
候儀ニ有之右目論見之儀者頼母方重
立取扱ニ而同御家来松井圖書方も其儀
ニ携有之良兼而三兵衛ゟ承罷在候付同人へ
善兵衛を為引合私倶々及再談候上右重助
并藝州諸口（ママ）嶋瀬戸田新兵衛長州萩久米蔵
石州馬嶋音五郎同州外之浦安倍（ママ）同州
高佐村新作等を水主ニ雇入渡海之手筈
示合罷在候内同四月水主とも一同酒犯之
余り御領主持山与者不心付右外之浦山手
之立木五六本伐荒候所其儀相顕船頭
之儀ニ付私壱人御領主役場へ呼出糺請

難差量候間掛引自由之ため小船之方
沖走之都合も罷在ト工夫を以藤三郎へ相誂
八拾石積壱船神東丸ト名付沖船頭私名
前ニ而手輕ニ為口立右船代銀三貫弐百目
相懸候内壱〆八百目ハ藤三郎儀渡海目
論見加入之方へ出銀之心得を以手拂ニ
いたし殘銀者改而渡海被差免候ハハ追々
加入之受相勤差引致勘定候積及相筈
猶又藤三郎手續ニ而海部堀川町伊勢屋
与兵衛方ニ而私藤三郎連判證文差入銀
壱〆目利付之相對を以備受候上當表酒
商人　酒弐拾樽積いたし大麻山立木
及見旁庄助善兵衛義私ニ差濱田表へ
向罷下候積夫々申合讃州小豆嶋馬木
村重助外弐人を水主ニ相雇庄助善兵衛
一同神東丸へ乗組同七月十八日當表出帆致
藝州廣嶋へ着船之節私壱人外用有之
同所　上陸同八月二日右之もの共ニ先立濱
田表へ罷帰候跡ニ而船中賄不引足候付乗
組之あの申談長州上之関或者赤間関ニおゐて
積入之酒追々ニ不殘賣拂賣代銀を以取續
候事之良同九月二日右之もの共濱田表へ着
船之上申聞右様入津及速々最早北海乗
廻難出来時節ニ押移候付其年之渡海者
先相止翌年三月頃可罷渡積夫々申談
水主之内重助八其侭船中ニ差置外弐人
八存外海上不切志ニ付暇差遣庄助善兵衛

終ニ同六月濱田領入津差留住居帳外
仕申付恐入候得共竹嶋渡海之儀頼母
方内沙汰之趣も有之候儀ニ付右領分
不立去其儘前書きく方ニ舟を忍罷在
猶追々申談船中賄之儀者善兵衛引受
藤三郎外壱人ゟ受取候金子を以飯米其外
日用之諸品買調積入候得共被嶋ニおゐて
荷積之異變可有之も難斗者存私一己
ニ存量平日心易いたし候周防守様御家
来楢崎百八郎方へ夜中竊ニ罷越右之
次第相咄シ所望いたし同人所持玉目弐匁五
分之鉄砲壱挺玉薬相添乞受歸猶又私先
代より持傳候鎗之身弐穂を研立手元ニ
有之細丸立七本を手細工ニ削弐本八先江
鎗之穂を仕込五本八同様鎌を仕込素鎗長
柄鎌等を取拵其外斧鉈等も取揃不殘
船中へ差入船用意出来ニ付出帆之儀
六月十四日善兵衛を以三兵衛方へ申遣
候處表立候儀ニ無之内へ自然海上ニ而
外船より相尋候儀有之候共濱田役筋
ゟ差圖与申儀者勿論石州船之由をも
相包置可申旨頼母方被申聞候段三兵衛
ゟ申含候趣善兵衛相咄候ニ付承知いたし
同人始水主六人私共都合八人神東丸江
乗組同十五日濱田表出帆直様竹嶋へ乗
廻可申心組之處天氣合見横風強吹

出一旦長州三嶋地先へ流寄候付再度日
和を見定乗出隠岐國福浦へ着夫より
順風ニ随子之方へ沖走いたし松嶋地先を
も罷通り候節船中ゟ見受候處果而小嶋
ニ而樹木等も無数更ニ見込無之場所ニ付態々
上陸不致其侭乾之方へ乗廻同七月廿一日
竹嶋へ着船礒際岩組之間へ船を乗込何連
も上陸いたし嶋方見請候處前以推察之通
人家無之空嶋ニ而絶而渡海いたし候者も
無之与相見草木繁茂いたし足の踏所も
無之鷲鷹之鳥類数多飛廻礒際より
地先へ懸鮑其外魚類眼を見余り候程夥
敷寄集罷在海中より八胡嬪与唱其形
牛如し獣物追々ニ上り又者山手より鷲之
形ニ而大中鶴程も有之鳥飛来人躰を見
請驚候哉可飛掛勢ニ付矢庭ニ持参の鉄
砲玉込を以追々打放先ニ進候鳥壱羽胡嬪壱
疋打殺候付其後者近寄不申右打留候鳥獣
八其侭船積入夫々嶋の四面をも一同船ニ而乗
廻私所持之磁石を以方角を極細見およひ
候處々丙戌ゟ艮方へ流候大嶋山ニ而廻廿里
斗も有之巽之方ニ聊船掛可相成岩間有
之迚ニ而其外滞船場所も無之右岩間へ
船を繋留置鳥獣威之ため邊之草木
伐取昼夜無絶間篝を焚置礒邊之鮑
其外魚類を取日々食用いたし猶思々船
中ニ有之鎌斧鉈等を持追々上陸繁茂
之草木を伐拂道を開奥深く山手へ入
込候ニ隨人参ニも可有之与見込候草拾
五六株程見當候付堀取候儀ニ而右嶋一圓
樹木者欅桑杉櫻其外雑木ニ而是又思々ニ
木数都合四五拾本斗伐取夫々船へ積入嶋
之次第私自筆ニ而絵圖ニ写取素ゟ谷間
ニ者潔水も有之右躰有益之地ニ無紛相
見候ニ付早々立帰其筋へ可申通与一同乗
組同八月九日竹嶋致出帆候海上ニ而又候難
風逢候付全龍神之崇ニも可有之哉与何連
も心附怖敷存積歸候鳥獣者勿論材木
等も過半海中へ投捨船躰を輕め相凌漸
長州越ヶ濱地先へ流寄天氣合立直候期
を見合乗出同月十五日濱田へ歸着いたし候
付私者船中ニ相殘不取敢善兵衛を以右之
次第三兵衛へ為相知候處同夜同人船中へ
罷越嶋方之様子相尋候付細見之始末
具ニ相咄莫太有益之地ニ無紛候間改而渡海
被差免之様頼母方圖書方取扱之儀
善兵衛倶々申述立別其後も私者前同様
きく方ニ舟を忍居候而善兵衛談人参与
見込候草三株并海中へ投捨殘候材木拾
六本有之右之内桑欅取夫良材三本
頼母方圖書方へ相贈候積を以三兵衛方へ
善兵衛持来いたし披露之儀相頼猶又
聞請之否をも相尋候處細見之趣相含
周防守様へ相伺追而可及沙汰間善兵衛ニ者

一先致歸坂之様右向ニ被申聞候事之良
三兵衛相答音物受用有之候段申聞
候付私者其儘濱田ニ相殘善兵衛与水主共
一同神東丸へ乗組同九月二日同所出帆當
表へ罷登候船中又々賄ニ差詰候ニ付長州
赤間関最寄へ上陸名所不存商人店ニ而
船中ニ有之鎗鉄砲等ニ不用之船具四品
取交都合代金壱両ニ賣拂賣代金を
以當然取續同月十六日歸坂之上水主共
八不殘暇差置伐木拾三本者藤三郎方へ
預置船者借銀之濟方ニ与兵衛へ相渡候事
之良善兵衛より申越候付其意ニ隨其筋
ゟ之沙汰相待居候處去々午五月日不覚神
東丸元水主重助罷越申聞候者此度阿
州船乗藤右衛門与申者同州同貞次嘉兵衛
栄蔵并當表新戎町阿波屋源蔵申合
神東丸元水主新兵衛久米蔵をも水主ニ
雇入竹嶋渡海之儀存付右重助八同人
同村船乗平右衛門仲蔵等別廉ニ申合
阿州船与乗合ニ相成渡海之儀示合候ニ付
而者兼々私志願之趣も有之濱田表役筋
ニ而取調中ニ候上者無断相渡候而者荷与
心附善兵衛申教を以三兵衛方へ届參候処
渡海不相成ト者不申聞候付夫々申合致
出帆候積之良申聞候ニ付驚入候得共私者
未其筋ゟ沙汰無之儀ニ付自儘之渡海
も不相成儀与存重助噂之趣承置候
迚ニ而其節者勿論前段申上候外竹嶋
渡海仕候儀無御座最前庄助始其余の
者ゟ差出候金銀八渡海目論見諸雑
費ニ不殘懸拂自己之徳用取候儀も
無之尤右竹嶋ゟ丙戌之方へ當猶又海
上五六拾里斗相隔一際雲氣覆重り
候所有之自然朝鮮國ニも可有之哉卜其
節何連も心附得共右國へ可乗廻存意
之筋も無之候付渡海仕候義曽而無届其
後私義一旦上方筋へ立越所々漂泊之上
猶又立歸きく方ニ忍罷在候折柄此度無存
□周防守様取替被仰付候付者私志願
之筋も辨指可相成卜殘念ニ存罷在候処
被召捕御吟味請右竹嶋者朝鮮持地ニ而
渡海御制禁之次第始而承重々恐
入後悔仕候事

右天保丙申歳御吟味口上

竹嶌方角圖　　前書申口招合を以
　　試尓圖かく

按隋書曰開皇二十年云ニ當皇朝　推古天皇隋八年庚申
明年上遣文林即裴清使倭國度百濟行至　都斯麻　對馬
一　二　一二

ニ　フ　一　二　ヲ　ニ　一　一　ニ
竹嶋南望耽羅國経都斯麻國　在大海中　一支　壱岐
一　ニ　一　二　一　一　竹斯　築紫
又東至一支國又至竹斯國
ニ　一　ニ　一

『石州松原浦無宿八右衛門一件　天保七申』

（国立国会図書館所蔵）

河内守
申渡
松原浦無宿
八右衛門

其方儀石州松原浦ニ而船乗渡世中　北海筋渡海之節ニ見請候竹嶋　を朝鮮國附属之地与者不弁旨雖申立右嶋者人家無之空嶋ニ而良材　有之海岸魚類も多く魚業伐木等いたすなら八助成ニ可相成与存附　出府之砌元領主松平周防守家来三沢五郎右衛門村井荻右衛門江便　り領主益筋ニも相成由を以同嶋江渡海志願之儀大谷作兵衛江申立　置帰村後右之趣濱田表ニ罷在候同家家老岡田頼母事秋斎聞込由ニ　而同人召仕橋本三兵衛ゟ尋請必定作兵衛外弐人江申立候次第通　達有之儀与存益地ニ相違無之旨咄聞追而右嶋者いつれ之國地与も　難差極手入等之儀者可存止旨荻右衛門より申越をも不取用再應執　成之儀三兵衛江相頼砌右最寄松嶋江渡海之名目を以竹嶋江渡り稼方見極候上弥益筋ニ有之なら八取計方も可有之由ニ而秋斎并同家　来松井圖書も心得居候趣三兵衛申聞候迚大坂表ニおゐて銀主共聞　請宜敷ため同所周防守蔵屋敷詰家来嶋崎梅五郎江三兵衛ゟ頼之書　状申請中橋町庄助等を申勧銀主ニ引入殊右目論見中外不届有之領　主ゟ濱田入津差留所拂ニ相成候身分ニ而元住所ニ罷在大坂安治川　南弐丁目善兵衛其外之もの共乗組竹嶋江渡海いたし　圖面相仕立又者立木伐採既人参与見込紛敷草根等持帰候上者異國人ニ出逢交　通等いたす儀者無之与も素ゟ國界不分明之地者乍心得畢竟元領主　先代重御役柄中故志願も成就可致哉抔相心得秋斎其外之もの共江　申立既異國之属嶋江渡海いたし立木等伐採持帰候始末　御國體江對し不軽儀不届ニ付死罪申付候

「(天保八年)御觸」

（『郡方御觸　十四』）

一　今度松平周防守元領分石州濱田松原浦ニ罷在候無宿八右衛門竹嶋江渡海いたし候一件吟味之上右八衛門其外夫々厳科ニ被行候右嶋往古八伯州米子之者共渡海魚漁等いたし候得共元禄之度朝鮮國江御渡ニ相成候以来渡海停止仰付候場処ニ有之都而異國渡海之義者重キ御製禁ニ候条向後右嶋之義も同様ニ相心得渡海いたし間敷候勿論國々之廻船等海上ニおゐて異國船不出合様乗筋等心かけ可申旨先年も相觸候通り弥相守以来者可成たけ遠沖乗不致様乗廻り可申候右之趣御料者御代官私領者領主地頭ゟ浦方村町共不洩様可觸知候尤觸書之趣板札ニ認高札場等ニ懸置可申者也

二月
右之通可被相觸候

『御仕置例類集』

拾六之帳　掟事并御触申渡等を背候部　奇怪異説之類

天保十亥年御渡

町奉行
大草安房守伺
一　三宅土佐守家来渡辺登其外之もの共、不届之取計いたし候一件

五人組持ち店
旅人宿彦兵衛
幼年二付後見
金次郎

右之もの儀、蘭学を好、地理物産等之儀を阿部友進より聞覚、同人世話いたし候迚、届も不致、大塚庵より鉄炮質ニ取、流ニ相成候儘所持いたし、又は花井虎一方え秀三郎連立参候節、渡海中風波ニ逢、呂宋・サントウイク・アメリカ国等え漂流いたし候ハゝ、外国をも一見可相成、異国船ニ出会被捕候とも、相頼帰国相成候事之由、同人申聞候節、艱難之中ニ面白き儀も可有之抔、不容易儀を雑話いたし、又は入用出金廻船雇方等之手段可為致と、順宣・順道え右嶋渡海之始末相咄、同意為致候処、斎藤次郎兵衛儀、右渡海容易ニ願済ニは不相成、廻船粮米之手当出来候ハゝ、不及願出帆いたし候心得之由ニて、同人儀鳥栖村え参り、順宣え直談可致旨申聞候節、順道より添手紙貰請参候ハゝ宜可有之旨相答候段、右始末、旁不届に付、永牢、此儀、同意　之もの共申合、無人島え渡海を心懸候段、不容易儀ニて、自然以後之取締ニも拘候間、御仕置附ニ安房守申上候通之趣意を以、永牢申付候方二可有之、尤鉄炮所持いたし候儀も有之候得共、右廉を以可重筋無之候間、伺之通、永牢可申付処、病死いたし候段、追て申上候間、其旨可存段、一件之もの共え申渡、

（朱書）
評議之通済

御仕置付ニ安房守申上候例

去ル申年、評定所一座掛伺之上御仕置申付候、大坂安治川南弐丁目善右衛門借家善兵衛儀、竹嶋を朝鮮国附属之地とは不相弁候とも、元石州松原浦ニ罷在候八右衛門、右嶋え渡海之目論見いたし、大坂江之子嶋東町藤三郎銀主ニ加り候間、八右衛門え掛合向引受呉候様藤三郎任頼、八右衛門申合右目論見中、同人は外不届有之、領主より所払ニ相成候以来、八右衛門代ニ成、右領主松平周防守家老岡田頼母事秋斎召仕橋本三兵衛え引合、殊ニ洋中ニて外船より尋受候とも、浜田役筋より差図之儀は勿論、石州船之由も申聞間敷旨、秋斎内意之趣、三兵衛より承、旁不筋之儀と乍心附、右嶋え相渡持越候木品等同人方え持参いたし、秋斎并同家来松井図書えも差出、猶又表立渡海差免有之度旨、執成相頼、追て沙汰可有之由之談受候後、藤三郎倶々、阿州下助任村藤右衛門え右之趣咄聞、同人并新戒町源蔵其外之もの共、同様渡海相企候節も、藤三郎より手船借受、又は一応三兵衛え申聞候上渡海可致抔、彼是世話いたし遺候始末、不届ニ付、重追放申

付、大名之内え引渡、右領主領内之外、猥ニ他出致間
敷旨可申渡哉と相伺、御差図、大坂え差遣、永牢、
深川佐賀町
金七店
秀三郎
右之もの儀、地理物産之儀を聞覚、去々酉年十一月以
来、知ル人花井虎一・金次郎・阿部友進申合、無人嶋
渡海之儀を目論見、絵図書物等取調、折々出会いた
し、其上虎一方え金次郎一同参候砌、右嶋渡海之節、
呂宋・サントウイク・アメリカ国等え漂流いたし候ハ
ヽ、不思寄外国をも一見可致、洋中異国船ニ出会被捕
候とも、相頼候得は帰国可相成事之由、不容易儀を雑
談いたし、順宣・順道儀無人島之儀を承合候迚、委細
物語いたし、絵図書類をも貸遣候始末、不届ニ付、江
戸払、
此儀、去ル申年、評定所一座伺之上御仕置申付候
大阪中橋町宗兵衛支配借家庄助外弐人儀、竹嶋渡海
御制禁之儀不相弁、石州浜田元領主家来共承知之上
は、子細無之儀と心得候とも、格別国地を離候場所
え猥渡越候段、如何之儀と可心附処、其筋石州松原
浦ニ罷在候八右衛門勧ニ随ひ、庄助・藤三郎は、玉
造八尾町半三郎をも申勧、銘々徳用ニ泥ミ、渡海入
用出銀いたし、又は右嶋え之廻船造立、定七ハ半三
郎任頼、八右衛門等え之引合向引受、庄助は追て右
目論見無覚束存、断およひ、藤三郎は手先善兵衛
を、八右衛門え差添渡海為致、嶋方より持越候木品
等預り置、既同家来共より表立難及差図筋之旨申聞
候由をも、善兵衛帰帆後銘々承知之上、藤三郎は善
兵衛倶々阿州下助任村藤右衛門え、竹島之儀咄聞候
故、同人其外之もの共も、渡海いたし候次第ニ至、
殊其節讃州馬木村重助え所持之手船貸遣、同人右嶋
より持越候材木類、定七売払之世話いたし遣候始
末、一同不届ニ付、藤三郎は預り置候木品取上、中
追放、定七は軽追放、庄助は大坂三郷を構、江戸払
申付候例之庄助ニ見合、於事実強て差別有之間敷候
間、伺之通、江戸払可申付処、病死いたし候段、追
て申上候間、其旨可存段、一件之もの共え申渡、
（朱書）

『松井家譜　壹』（浅野家文書　浜田市教育委員会所蔵）

（康任の項）
天保七年丙申十月廿九日元領分石州濱田ニヲイテ家
来岡田頼母松井圖書竹嶋渡海製禁ヲ犯シ候儀ニ付用
番ヨリ封書ヲ以テ尋有之
天保七年丙申十一月十日右同断猶又封書ヲ以テ尋有之
天保七年丙申十二月廿三日元領分石州濱田ニヲイテ
一家老岡田頼母松井圖書竹嶋渡海製禁ヲ犯シ候付江戸
表へ呼出厳重可及吟味処両人共自滅イタシ検使差向取
糺候得共自殺ニ付不及兼テ口方不行届不埒ニ思召候依
之永蟄居被　仰付之
（康爵の項）
天保七年丙申十二月廿三日岡田頼母松井圖書禁製之
場所竹嶋渡海ヲ犯候付江戸表へ呼出及吟味ヘク処於
在所両人自殺イタシ不行届且父隠居下野守永蟄居被
仰付依之将軍目通差扣之格ニ心得候様達アリ
其方家来松井図書岡田秋斉事尋之義有之口下之義寺

社奉行ヨリ相達候ハ無卒入念可申付口口無其義既ニ両
人トモ発足以前於在所致自殺候段不行届事ニ候此段
可口旨御沙汰候
其方元領分石州松原浦ニ罷在候八右エ門竹嶋渡海
目論見之義家来共引請彼是取計候義ハ不在由ニ候
得トモ重キ御役中之義領分取締向等別而厳重ニ可
申付處無其義既ニ八右エ門其外之者トモ渡海イタ
シ候ヲ右体家来共不行届之取計イタシ候ヲ更ニ不
在罷在殊ニ松平亘ヨリ宗對馬守記録書抜一覧ヲ差
出候節何故右嶋穿鑿イタシ候哉之義相糺シ候心附モ
無之不都束之事ニ思召候依之永蟄居被　仰付候也

『天保七申年竹嶋一件御沙汰書留』（梅田八郎兵衛）

岡田秋斎死骸跡
一　居間緑座敷
一　死骸頭西向き　但　諸肌ぬき
一　腹少し右江寄ってかき切り疵一ヶ所
一　咽吭江懸疵一ヶ所　但　長サ四寸五分
　　深　一寸七分
一　咽より少し下がりかき切り疵一ヶ所　但長一寸
一　鼻口より血出
　　着類
一　紹羽織壱ツ火打三所紋　但　ひもひし打
一　白帷子
一　襦袢白さらし
一　帯御納戸関東織
一　浅黄易小紋繕い衣下敷
一　脇差死骸脇ニ抜身鞘とも之有
一　身長サ九寸五分　但　日釘差之有銘聢
　　不相分身ニのり有之
松井圖書死骸跡
一　表座舗
一　死骸頭北向顔東向
一　両手にきり
一　咽吭江懸　左へ寄り一ヶ所　但　長サ三寸七分
　　深サ一寸四分
一　臍脇左り方にかき疵一ヶ所　但　長サ一寸二分
　　深サ一分
　　着類
一　白縮帷子
一　帯　緋縮緬丸くけ
一　下帯　白木綿
一　毛氈を敷
一　懐剣七寸五分銘不分　但　銘不分由紙ニ而
　　結切身ニ少しのり有之

『松井家御家譜付録　九』

（浅野家文書　浜田市教育委員会所蔵）

一　吉田九八郎浦同心ノ咄　天保六未年秋カ　松原浦
　殊ノ外大ナル竹有リ是ハ何レヨリ求メシヤト問フ
　沖ニテ捨ヒタリト云　又木挽大材ヲ挽割ル有リ
　何共名ノ可附ヤウ無之木ナリ　此木ハ何ノ木ナリ
　ヤト不知ト云　何レニ得シヤト問フ　沖ニテ捨ヒ

タル由ト云　又大キナルアハビ貝ホ町方ニ賣物ニ
出シ有之不思義ノ事ト思ヒタリ　松原浦舩頭清助
ノ悴八右エ門先年罪科有之御領分追放者ト云者手
舩三百石積位大阪ニ登リ　金主有テ七八百石位ノ
堅牢ノ舩ニ乗テ石州ニ下リ内々竹嶌ニ航海セシヤ
ニ浮説モ有之　八右エ門ナル者可召捕手筈ノ處
右ノ者ヲ元老岡田頼母近ツケテ其嶌ノ容ヲモ尋子
誠ニ掘出シ物ノト思ヒ行々ハ濱田ニモ可相成　上
ノ御為大ナル御益ト思ヒ篭マレ　於江戸表対州候
御家来迄問合ニ相成ルト　以ノ外右ハ朝鮮ノ持ニ
テ日本人手ヲ付ル事ニテ無之由ノ答ナリケレハ
其段石州ヘ急飛ヲ以テ申参ル以前ニ寺社奉行所ノ
御手ニテ八右エ門以下一件引合ノ者召捕ラレ引立
ラレタリト云
同件御用部屋書役小川源六ノ咄　岡田八十郎祖父
隠居同氏秋齋元善御年寄役松井圖書以下御差紙ニ
テ御呼出　此件ニ付両人トモ御用召名代出ル御用
ニ付出府仰付ラル　又両人無難ニ出テハ御家何躰
ノ御咎ニ可相成難計速ニ自尽有之様江戸重役ヨリ
直追啓ヲ以テ申来ル天保七申年六月廿一日ナリ
右ニ付テ八月番御年寄三宅氏ヘ直に相達スルナル
ニ畏縮シテ不果　他に代ランヲ乞ヘトモ月番當然
ノ務ナリト云テ頓着セス　三宅氏此人ハ若トキ御用人江戸詰ノ節人品ハカナリニテ志操ナケレハ千鯛箱ト云　又ハ白髯ノ行燈ト云術無ク書役小川源六ニ依頼して云ハシメントス　源
六不聴私ハ書役ナリ御年寄ノ勤前ヲ御中小性ノ書
役イカテ勤メ得ヘケンヤト云テ不肯　三宅氏言小
川氏ハ少年ヨリ格別ニ入魂ナレハ自然ト諷諫シテ
呉ヨト折入テノ依頼無限手間取テハ以ノ外秋齋老
ニ調シケレハ耳遠ナシトモ流石明敏立所ニ相分一
段ト厚承知イタシタリ　扨テ物ハ取リ様ニ依テ重
モ軽クモナルモノトノ一言而已圖書ハ若キ事ナレ
ハ　イカニモ無覚束厚申開ヲ頼ムト言　松井氏ニ
ハ未年若ノ上秋齋老翁ノ聟ナレハ殊ノ外気遣ヒニ
テ小川氏ハ又二度ノ使ヲ頼マレ参リタリトノ談
松井又左エ門ノ咄　竹嶌ノ件ニ付岡田氏松井氏御
呼出ニ付急出府仰付ラレタリトノ云　迚モ無難ニ
譯ニテハ無之併極老ノ事ソレハ如何ニモ無覚束秋齋老翁當中七十四歳万一仕損スル義有之テハ不相済嗚呼
南輪右エ門平七ノ筆頭禄三百六十石存在ナラハ共ニ参リテ
其誠ヲ尽サン二只我一人ナレトモ学友ノ志尽サン
ト　暮點燈ノ頃ヲ得テ岡田氏ニ行ク玄関ニ至リ
見レハ老分以下大勢詰居又左エ門云　明日出府ノ
命有リト聞御暇乞ニ参リタリト　御通リアレト
御通リアレト云　奥ニ至レハ家族一同圓居シテ酒
宴ノ最中也秋齋翁麻ノ短衣ヲ着テ襟ヲ開腹ヲ顕シ
酩酊ニテ云　昔時ノ学校友達ナリ不思儀ナルハ御
家中数輩入魂ニセシニ今日ニ至リテ誰一人尋訪人
ナシ　貴方ノ常々疎ナルニ僕カ老タリ長途イカン
ト尋ラレル忝ナシ共ニ飲ムヘシト献酬無絶間翁自
ラ腹ヲ皷ツテ小声兵ノ交リ頼ミアル中ノ酒宴カフ
ト謡ヒ旦又左ニ此腹ノ御役ニ立ツ事モアランカト
云テ自ラ飲ムヲ唸容腹ヲ打テ大笑ヒ旦此腹ノ上ニ
盃器ヲ置テ是ニ酒盛リテ自ラ飲ムヲ得意トス右様
ノ戯ヲ成シテ飲ヲ尽ス　松井氏酩酊ニ事ヨセテ去
ル　帰邸シテ登下ニ坐シテ考量ス城鼓九時ヲ報ス
今ノ十二時ナリ　最早時剋好シト思ヒ岡田氏ニ至ル
玄関ニ家僕両三人酔倒ス　奥ニ至ル寂トシテ人ナ
シ　妾イヲ一人燈下ニ坐ス
松井氏云フ時剋ナラン可起ト云　翁カ寝室ヲ窺

フ嚊聲甚大如何ニモ熟睡百年ノ齢ヲ保ツ人ノ如シ
松井氏心中大ニ感シ翁カ寿人印暁ニ不達モノヲ
嚊カキ熟眠スト　三千石ノ謄カ（巻カ）アリト潜ニ思ヒタ
リ　妾ヲシテ起サシム　松井氏屏風ノ外ニ行テ窺
フニ手水ヲ持来レト　銅盥ヲ洗面百ノ帷子黒ノ絽
ノナ徳着キ自ラ手燭ヲ採テ茶室ニ行キ同氏孫ノ八
十郎伊賀竹右エ門ト云後千秋ト云後ニ従テ入ル　其跡ヨリ
松井刀提テ至ル　翁ハ下リ向ニ坐孫八十郎上リ向
キニ坐シテ松井氏右ノ方ニ坐定ル　妾イホ白木三
方ニ短刀紙ヲ巻キテ側ヨリ翁ノ前出ス翁刀を採リ
孫八十郎ヲ誡（戒カ）メテ曰　士ハ如此事ハ往々有ル事ナ
リ見置キテ手本ニセヨト言終リ襟左右ニ披キ臍下
ヲ八寸余切ル　松井氏側ヨリ見事ナリト云　松井
氏既刀ヲ持咽喉ヲ切ラント云　手振ッテ不叶　翁
刀云　又左頼ムト云　松井氏心得タリト云テ左ノ
手ヲ以テ翁ヲ抱キ右手翁ノ手ニ添テ咽喉ヲ切ル
刀業物ニテ能ク切レタリ　翁ノ刀投ケ両ノ手ヲ疊
ニ付テ少シ後ニシサリ壁ニ寄テ瞑目ス
唸容生ル如シト松井氏カ云　翁生前種々悪シキ
事アレトモ其終リノ正シキ是ヲ以テ生前ノ悪償フ
ニ足ランカ　右ノ趣キ追々若手ノ面々ヘ申通シ呉
ヨト松井氏ヨリ雅文ヘ咄有之　在ノママ記シテヲキ
又右事件ニ付川部惣太夫ノ談　江戸表ヨリ町奉行
与力同心検使トシテ石州濱田ニ来着アリ　岡田八
十郎屋舗ニ於テ一件引合ノ者御吟味アリ　其節重
役ノ内重々取扱候者呼出ニ付三宅氏可罷ノ処恐怖
甚シク慄々トシテ重役ノ任ヲ忘シ　君家ノ大事モ
不思ノ者ノ如シ　病気トシテ御年寄役名代後藤助
左エ門差出シ初発ヨリ之始終尋ラレケレ共返答不
詳故能心得タル者可差出トノ事ニ付引取委細言フ
　三宅氏同席ニ談スレトモ誰承知セス共ニ御年寄
役ナリト云　三宅氏大ニ困却シテ書役川部富八後惣太夫依頼シテ年寄役ノ加番ヲ御徒士横目并ノ書
役トハ珠ラシキ事ト云　右吟味済口書調印之節モ
名代ニテ済度ト三宅氏申サレケレ共権兵エ強テ申
サシ　無余義矢柄介罷出調印致サレシト云　其頃御家老日勤岡出求馬元部谷口勘兵エ御年寄役太出権兵エ三宅矢柄ノ介四人ニテ御政事取扱候也雅文カ云大事ニ臨ミテハ婦人勇ナル
モノ也ト云　左モアラン　秋齋翁ノ妾イホ短剱ヲ
三方ニ戴テ翁ノ前ニ出シ小襖ヲ小シク開キテ翁ノ
終焉ヲ見届ケ　松井圖書ノ妻岡田久仁子夫ノ少シク
後レタルニ目シテ腰抜ケ士也ト云テ其夫ニ励マス
ト云　国ノ重臣ニシテ月番ヲ勤タル君家ノ大事ニ
掛テ国家ノ重キヲ忘レ慄々然トシテ縮身スト宣ナ
ル哉千鯛箱ト云又白昼行燈ト云名不空外装異義ア
リテ内忠信ノ心ナキヲ云

『古老物語』（浅野家文書　浜田市教育委員会所蔵）

一　古老物語ニ云石州那賀郡松原浦ニ清助ト云四五百石
積ノ手舩ヲ以テ近国ヲ航海シテ稼ク者アリ　或トキ
清助ナル者郷大夫岡田頼母元善ニ告テ云當国ハ大材
ニ富ミ鉄ニモ尤富ム　自国ノ材自国ノ鉄ヲ以テ世界
ニ一二ヲ争フ大舩ヲ自国ニテ打立タランニハ五六千両
モ費サン　此船ヲ以テ肥前ノ五島ニ船マチシ中冬数
日時化ノ頃世上通船無之暴風ニ五島マクロ魚ヲ数千
本積込ミ薩摩ノ鼻ヨリ二百里モ大洋ノ中ニ乗出シ帆

ヲ十分二巻テ計江戸海口ニ立テハ二日半三日ニシテ品川海ニ入ル　十分時化タル時ナレハ数倍ノ利ヲ得ルモ一瞬ノ間ナリト　金庫中ニ居する金貨を以テ為之ハ坐シテ大利ヲ得ル理アリト　郷大夫岡田氏心鎔ケテ魂天涯ヲ飛トモ云　老練ノ人故ヘ誰アツテ抗スルモノナシ　御年寄元〆小久江権右エ門政成（若水ト云）（隠居シテ）

二問不可ナリト云　十一万石以下ノ一小藩ニテ世界一二ノ船ヲ造ラハ世界一二ノ笑ヲ得ルナリ　三千石積ノ大船ナリトテ破ルレハ必ス沈マン　千石積ノ船作ニ如シト云　是船一時ニ破レンヤト　若此大船ヲ造リテ破ルレハ又造破ルレハ又造リテ無涯ハ好カラン　只一度二度ニテ止之ハ一向不造方善カラント云

此策用ヒラレハ　寛裕公ノ御許ヲ得テ大船ヲ造ル濱田城郭後　川口ユルキ磯ニ於テ造ル　国中職工ヲ集テ造ル　檣ハ大麻山ノ杉ヲ以テス　未ノ木四人立テ頭ヲ顕スト云　其大ナル又知ルヘシ　三年ニシテ成功　船進水セシメテ外ノ浦港中ニ繫ク　夫ヨリ解纜シテ大阪ニ昇ル　大阪川口ニテ評ス　石見の阿房丸ト云　又江戸ニ航シテ品川湾ニ入ル　普通ノ大船ヨリ遥ニ沖ノ方ニ碇ヲ卸シテ居ル　遠望スル大山ニ均シト云　江戸ノ邸執政ヨリ小史ニ至ル　船中ニ招聘シテ数日盛宴ヲ張ル　弦歌耳ヲシテ飽シム　執政ニ引出物重箱筍布帛中ニ満ツ　小史ト雖モ有差而已

此船再ヒ航海スルニ紀州ノ沖ニテ船ノ　裂テ術ヲ尽シテ防ケトモ不叶　終ニ沈没ス　船頭清助ナル者不思議ニ死ヲ免レテハ十余年天寿ヲ保テ死ス　嗚呼小久江氏前見賢ナル哉　寶庫鑰ヲ守忠良ノ臣ト云ハ

『古老物語』（浅野家文書　浜田市教育委員会所蔵）

一　寛裕院様御代天保六年未六月中石州濱田御城下松原浦漁人無宿八右衛門と申者小舩ニ乗り沖合出漁猟いたし居候処　俄ニ西北の風吹起り濱田より海程八十里程隔テ竹嶋ト申嶋へ漂着いたし候ニ付上陸之上嶋之様子を見るに方壱里斗リも有之岩山ニテ殊之外風景宜敷見なれぬ草木有て候　又大ひ成る竹夥敷繁茂せり大サ三尺五寸廻りも有て候　人家は更ニ無之又磯辺にハ蛇澤山ニテ大ヒなるハ差渡壱人余もあり実ニ珎敷物の由　所々を委敷見廻リ二日程滞留其内風も静リ候ニ付　小舩ニ乗リ濱田を目当ニ乗帰リ干時天保六年八月二日　家老岡田頼母（同人賀八年寄役）松井図書〆竹嶋渡海目論見之義八右衛門申聞候ニ付　承諾いたし　同人家来三人八右衛門都合四人ニ而再竹嶋へ相渡リ　唐木竹蛇等色々珎敷物を伐取持帰リ頼母図書へ差出候其内竹ハ手水鉢米いたし桶の代リニ相用ひ候由御家中ニテハ此事知人なし密ニ渡海いたし候由然候處其頃頼母へ中間奉公いたし候者　公儀の穏密人ニ而委敷御老中方へ申上候由　依而竹嶋渡海一条発覚いたし　公儀　御禁制之場所へ渡海いたし候段御吟味相成頼母図書両人江戸表へ御呼出相成候處　天保七年七月廿九日於濱田両人共自殺いたし候付　公儀　検使御役人濱田へ御差向相成

頼母家来壱人八右衛門は江戸死罪被仰付　其外頼（栖本三兵衛）

母家来三人御咎　被仰付候　同年十二月廿三日康任公右一件ニ付御不調法ニ依リ永蟄居被相蒙仰候（後竹右衛門）

同年八月六日頼母孫〆十郎へ千五百石減少千五百石被下置　家督相續被仰付候　同く亡父図書義自殺いたし検使被差向不容易筋ニ付厳重ニ御吟味可被及候処自殺〆付不及夫右始末不埒ニ付家督相續不被及御沙法旨相達候處　元祖以来数代相勤旧家之義ニ付格別之以思召ヲ以　図書悴徳之助被召出知行百弐拾石御下置御馬廻リ格被召仕候

天保七申年六月唐物密交易一件

竹嶋渡海之条ニ付御仕置相成候一件委細相認メ諸国津々浦々の高札物へ張出ニ相成候

『古老物語』（浅野家文書　浜田市教育委員会所蔵）

一　岡田頼母御家老松井圖書御年寄役竹嶋渡海目論見及發覚天保七申年七月廿九日終ニ両人共自殺いし□し候付検使トシテ江戸町奉行組与力同心御差向夫々取調其節重役之内重き取扱候者呼出ニ付三宅矢柄介月番故可罷出筈ニ候得共病氣分ニ而名代後藤助左衛門差出右初発〆之始終相尋候得共返答不詳故能心得候者可差出との事ニ付不取放御用部屋書役川部富八罷出尋之趣細詳及返答候処至極能々相分リ候旨此後呼出候節八富八罷出候様与力中聞候（有カ）

然候処富八義者此節御徒横目并席故年寄役之名代八御中小性以上ニ無候而者不相成段太田権兵衛強而被申候其後口書へ調印之節矢柄介呼出ニ候得共何分前□之次第権兵衛被申參義当人罷出候其頃御家老岡田求馬谷口勘兵衛御年寄役太田権兵衛三宅矢柄介四人ニ而御家政取扱候也

筆　者　紹　介

森　須　和　男（もりす　かずお）

１９４７年　浜田市京町生まれ

現在、森須薬品歯材有限会社代表取締役

浜田市文化財審議会委員

主に「近世海運史」、「近世の抜け荷」を研究

石見学ブックレット３

八右衛門とその時代

2002年3月29日

編　集　浜田市教育委員会

発　行　浜田市教育委員会
浜田市殿町１番地

印　刷　橋本印刷所
浜田市長浜町22-4